

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 篠原 俊一

平成二十六年を迎え、謹んで御祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき熱くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十二年目を迎え、県内外から高く評価されているところでございます。この『ながさきの空』も定例の発刊を重ね三百七十八号を刻むこととなりました。

本年も『長崎学』を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十六年

午年(うま)のゆく

越中 哲也

先ずは 新年を迎え、御祝詞を申し上げます

今年(今年は)は旧暦の干支(干支)「十干十二支」によると「甲午」の年とある。暦学は、古代中国の学であり、十干とは「五本の手足の指の動」と色彩の基(幹)とされる「五行(木・火・土・金・水)」を中心に置き、それに前後(左右)をつけ「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十干とし、其の基を月と共に支え、十二に変化する十二の月として十二支(子丑寅…)の文字を組み合せたと説明してある。

然し、子の文字が鼠となり、丑の文字が牛、寅を虎…と示されるようになった事については中国の古書にも不明と記してある。

中国で「干支」を用いて「年」を表わすようになったのは、B.C.三五〇年頃より、B.C.一六四年の間に始まったと諸橋先生の著書『十二支物語』には記してある。その中国の干支の文字が我国に伝えられた時期については古墳時代前後(AD.4)からであろうと言われている。

正倉院御物の中には十二支を明記したものが残っているし、万葉集の中に



馬 (有田窯業大学講師 岩田義実 作)

中国「本草綱目」によると馬は二才の物を駢(かん)二才の物を駒、三才の物を駢、四才の物を駢と言ふ。又馬の寿命は三二歳。歯によつて歳を知る。二十一才頃より歯が次第に黄色となり、二十六才、上下ともに黄色となり、二十七才より歯は次第に白くなり、三十二才になると上下ことごとく白くなるそうである。

古代より我が国では馬肉を食用とすることは殆どなかったとされている。前述の「本草綱目」馬肉の項に次のように記してあるので、中国でも馬肉を食する事はあまり無かつたようである。

馬肉は釜に蓋をしないで煮る事。倉米・倉耳(共に草の色)と共に煮て食すれば必ず悪病を得、十中八九は死ぬ。自死した馬は食べない。馬の肝と鞍下の肉は人を殺すので食べない。但し白馬の溺(尿)は消渴(糖尿)病や腹中のしこり、胃もどしを療す。

佛像の一つに馬頭観音がある。馬頭様とは本来はヒンズー教の神様毘紐奴の化身から転化した佛で大乘佛教成立の頃、観世音菩薩が六体に化身され、人々を救済される六観音の一つとして取りあげられ、忿怒の相をあらわし人身すべてが馬頭の像と頭上のみ馬頭を置く像があり、この菩薩には煩惱を断ずる功德ありと記してあるが、一般には馬の病氣と道路の安全を守る佛として旧街道にはよく石に「馬頭観音」と刻したのを見かける。

九州に現存する最古の馬頭観音像としては大治年中(一一二八)筑紫観世音寺(福岡・二日市)に奉納された重要文化財指定の大きな佛像がある。(『九州美術史年表』平田寛先生著)

江戸時代になると、長崎出島よりアラビア馬が多く輸入されている。『長崎実録大成』より其の二三を拾うと次のように記してある。

一、享保八年(一七二三)今年、御用ノタメ阿蘭陀国 馬四寸五分ヨリ六寸迄の牡馬三匹、同尺ノ牝馬二匹、尤 馬数五六匹ヨリ十四迄 索渡ル可キ旨 漢字ノ御注文ヲ以テ仰付ケラル

翌々年・享保十年の記録には馬七寸五分：牡馬五匹ヒキ渡り、馬術士「ケイズル初テ日本渡海ス」とある。又、その翌十一年の記録には更に詳しく、ケイズルが出島カピタンと共に江府に参府、将軍家よりカピタンと共に拝領金を受けた事が記してある。

も多く見ることが出来る。

今年の暦にある甲の文字については「草木が初めて種より地上に芽を出す様を写したもので甲の型を原型とし、転じてハジメの意に用い、更に転じて種子を保つものヨロイ(鎧)の意にも用いたと記してある。其の故に暦の基本は十干であり、甲の文字を暦の始に用いたとされている。

我が国では甲の文字を「キノエ」と読んできた。それは「五行」の最初の文字が「木」であり、木の文字を前後に分けて甲乙としたので、甲をキノエ(兄)、乙をキノト(弟)とよんできた。

今年の十二支は昨年が巳(蛇)だったので午年となる。午の文字の本来の意義は「陰陽たがいに錯する」意味であり、文字の上では直接馬とは関係が無いと記してある。

馬の文字は馬の型より作られたもので、毛色によつて白馬、黒馬は驪、青黒は驥、赤黄は駉、白馬黒たてがみは駟、黄白雑毛は駟と言ふのだそうである。その他、馬には龍馬、天馬、神馬、驚馬という分けかたもあるという。

中国の物語の中で「人間万事塞翁が馬」という話は良く聞いていた。其の物語は、塞翁が飼っていた馬がある夜、家をとび出して、遠く胡人のいる処に走って行ったそうである。ところが其の馬が数日後、胡人の処から多くの駿馬をつれて帰ってきたそうである。この事は「人生の禍福は定まったものではありませんが、全てを早計に判断する事なく静かに考えてみましょう」と言う事を教えているのであるという。

そう言えば、中学生の頃、先生より史記の中にある「時・利あらず驩(す)ゆかず、驩(す)ゆの行かざるを奈何にすべきや、虞や虞や若(なん)を奈何にせん」という項羽の詩も習った。驩は名馬の事で、虞は美姫だったとも習った。

さて、其の名馬は何時頃より我が国に大陸より渡ってきたのか判然とはしないようですが、多分に稲作と同時代に韓国より渡来したであろうと考えられるとお聞きした事がある。

更に享保十四年(一七二九)には、ケイズルに再び御用御召の事があり、ケイズルは享保十五年まで江戸に止り乗馬御上覧の事があり、オランダ通詞今村市兵衛には「阿蘭陀本草・馬療書」などの和解の事などが命じられている。其の後アラビア馬は度々もち渡られている。

將軍吉宗の命により輸入された馬は其の後、下総の小金原、安房の峰岡、陸奥の三戸に牧場が造られ、馬匹改良につくし、更にこの事は將軍家治にも継承され、明和五年(一七六八)よりアラビア馬の再輸入があり馬匹改良に尽くしている。南部馬の産地川守田には之の時、輸入されたハルという洋馬の墓があるという。

江戸時代に於ける長崎版画は江戸・大阪の版画と共に有名で多くの板元があつた。其の板画の一つに色刷「阿蘭陀人向狩図」・合羽刷の「唐人と馬の図」が異国趣味の版画として作られている。

この他、長崎には旧記によると「長崎くんち」の後日(旧九月十一日)、「お上り」が終了し湯立行事があり、続いて長崎奉行、代官、諸役人や宮司以下、流鏝馬場に至つて流鏝馬を見ると記してある。

又、長崎の町名には馬町、千馬町、櫻馬場町などがあり、郷土の歌人、中村三郎の歌碑(諏訪公園内)にも次の和歌が記してある。

川端に牛と馬とがながれて 牛と馬とが風に吹かるる

風信

○元日 先ず若水を汲む。八時、一家そろつて屠蘇雑煮を戴く。十時、三社参拝、続いて寺に行き祖先を拝す。午后、家にて来賀の人を待つ…(先輩の日記控より)

○新年の第一回長崎学講座は一月二十七日(月)午前十時半開講。韓国史考(講師・鶴田勝俊氏)御来会を御待ちおります。

○和食の文化がユネスコに取りあげられている。長崎県下にあつては其の代表的な物の一つに江戸時代より伝承された「長崎雑煮」があるという。推奨して下さるとの事。

○今月御寄贈をうけた書籍 幼きイエズス修道会St相川ノブ子先生より『Pierre Mounicou神父の書簡(和訳)』御労作感激して読ませて戴いた。

佐世保史談会より『談林五四号』考古学の岡村廣法先生の論文を中心に平戸藩史・佐世保を中心にした論考等。大いに参考となつた。

